

「ジャン・クリストフ」と芥川龍之介（二）

五島慶一

本稿は『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第十四号（二〇二一・九）に掲載した『ジャン・クリストフ』と芥川龍之介（一）の続編である。趣旨は前稿冒頭に記したがここでも簡単に繰り返すなら、「ジャン・クリストフ」及びロマン・ロランの芥川への影響を探るべく、書翰など非公刊のものを含めた彼の文章内にその名が見えるものを同時代の翻訳刊行状況などと共に抽出、整理を行った。前稿から引き続き、太字は芥川自身の作品タイトルである。前稿の範囲が大正十二（一九二三）年までであったのでここではそれ以降を扱うこととしたいが、それに先だつて前稿への修正と補足をそれぞれ一点ずつ行いたい。

【修正】一九〇書翰について

先に「本書翰は従来全集では八月一日附とされてきたが」云々と記したが、岩波書店前回¹¹十二卷本全集の第十卷（一九七八・五）では大正五年八月一日附とされていたことに、残念ながら前稿校了後に気づいた。すなわち、全集記載における経緯としては、まず現行全集書翰編第十七卷（岩波書店一九九七・三）発行の時点で一年遡る大正四（一九一五）年の同日附と訂され、更に同巻第二刷発行（二〇〇八・五）段階で年次は同じながら「月日不明」と改められたのである。恐らくその年の一月以降三月頃までに発信されたものであるということは前稿にて推定した通りである。

【補足】

◎「小説の読み方」 大正八（一九一九）年六月二十八日、東京高等工業学校（現・東京工業大学）文芸部主催講演会での講演

※ 前掲『芥川龍之介全集』第二十三卷（一九九八・二）に講演メモが収録されており、中に「ロオランとアナトール・フランス」という一節が見える。恐らく作風が対照的な作家の一例として挙げたもので、「飽くまでも好き嫌ひの問題で上下優劣の問題ではない」という部分と呼応するかとメモの記述からは推察される。他方、東京高等工業学校文芸部発行『浅草文庫』第四十六号（大正八（一九一九）年十一月三十日）に筆記録「芥川龍之介氏講演会の記」が掲載されているが、そこにはロランへの言及が見当たらない。内容は概ね前述メモに沿ったものでありながら、該当部分にその名は出てこないのである。これは筆記が「講演の大意」で「全文の主旨に影響が少いと思はれる箇処を幾分除いたり、改めたりし」た（前書き部分・無署名）ためか、あるいは芥川の方で実際に話す際に割愛した可能性の、いずれとも考えられる。

【本編（承前）】

◎座談会「家庭に於ける文芸書の選択に就いて」 大正十三（一九二四）年三月『女性改造』

※ 「女性改造の夕」シリーズの一回として行われた座談会の載録。阿部次郎・芥川・与謝野晶子・大村嘉代子（中途退席）・徳田秋声・千葉亀雄が出席した。おしまひに一つづつ日本の家庭に贈る読物をあげ（千葉）るといふ展開の中で、千葉が「近代のものには、読んで欲しいものが無数ですね。少くともロマン・ロオランやドストエフスキイは」などと発言しているが、それに対して芥川が反応した様子は見られない。

◎「僻見」 大正十三（一九二四）年四月『女性改造』

※ 「僻見」は断章形式の人物あるいは芸術論。この年三・四・八・九月の『女性改造』に断続連載された。そのうち、四月号掲載の「二 岩見重太郎」の中で、「ロマン・ロオラン伝を書いた、善良なるステファン・ツワイグ」を「円光の製造業者」すなわち歴史的人物を現実以上の偉人（芥川の云う「英雄」）へと仕立て、世に流通させた者の代表例と述べている。

そこで直接に揶揄されている対象は伝記『ロマン・ロラン—人と作品』(“Roman Rolland: der Mann und das Werk” Literarische Anstalt Rütten & Loening, 1921²)を書いたシュテファン・ツヴァイク (Stefan Zweig)であるが、その射程は彼によって描かれ、世に流通しているロラン像にまで届きうるものである。大正八(一九一九)年末から翌年にかけて、引き続きロランへの信奉を続けていた成瀬正一に対する芥川の態度から共通するものを、ここにも見て取ることができよう。近い時期における言及、例えば「或る恋愛小説」(次項)や「新潮合評会(四)」(次々項)を見ると、ここでは「ジャン・クリストフ」に対する芥川の距離が一寸なわち、一天才を描いた壮大な物語の例として素直的に言及することはあるものの、そこに自らの主観的な没入はもはや見られない上、作者であるロランのことも、批判こそしないものの世間における高評価に対してはその過剰である可能性を示唆している。そうした流れを辿って考えてくると、晩年の「彼」(昭和二(一九二七)年一月『女性』)において、物語上の設定とは言え「ジャン・クリストフ」を灰にしまっているのは何かの象徴のようにも見えてくる(後述)。

◎「或る恋愛小説—或は「恋愛は至上なり」—」大正十三(一九二四)年五月『婦人グラフ』(創刊号)
 ※ 作家である堀川保吉が「或婦人雑誌」の主筆に、構想中の小説のアイディアを語るという対話体の小説。保吉による登場人物の説明中に次のようにある。

達雄は音楽の天才です。ロオランの書いたジャン・クリストフとワッセルマンの書いたダニエル・ノートハフトとを一丸にしたやうな天才です。

◎「新潮合評会(四)」大正十三(一九二四)年十月『新潮』

※ 「新潮合評会第十七回(文壇時事問題)」として掲載されたもの。出席者は久米正雄、宇野浩二、千葉亀雄、菊池寛(遅れて参加)、田山花袋、芥川、中村武羅夫。芥川発言部分に「ローランやバルビユスの人道主義は前の仏蘭西の芸術至上主義的主流に対する反抗ぢやなかつたでせうか?」とあるが、これは文壇的潮流を概観しての言で、ロランの名は傾向的一例として挙げられたに過ぎない。

◎「彼」 昭和二（一九二七）年一月 『女性』

※ 「天才の伝記か何か」を貸してくれと言われた「僕」が、病床の友人「彼」に提示したのが「ジャン・クリストフ」であるという設定。やがて「彼」は亡くなり、「いつか僕が彼に貸したジャン・クリストフの第一巻」も「遺骸と共に焼き棄て」られた事を訃報にて知る。

小説の「彼」のモデルになったのは、芥川と東京府立第三中学校で同級生だった平塚逸郎。『芥川龍之介全集』第十七巻（岩波書店 一九九七・三）の「人名解説索引」（関口安義）に拠れば没年は大正七（一九一八）年とのことである。しかし、同作の「僕」は叙述冒頭で「まだ一高の生徒だった」とされ、そのことは、「ジャン・クリストフ」を貸す約束をした後に「弥生町の寄宿舎へ帰つて来た」とあることから裏付けられる。その約束をしたのが「或花曇りに曇つた午後」（第四節）とあり、それから「彼は半年の後」に「彼」が転地入院、「僕は学校の冬休みを利用し、はるばる彼を尋ねて行つて、先に貸した本を読んだかという話をし（第五節）、その後「丁度翌年の旧正月」に「彼」が亡くなり本も焼かれた（第六節）という展開なので、その時点まで「僕」は高等学校生であると

いう設定と読める。

しかし、既に見た通り、芥川が「ジャン・クリストフ」を読んでその感激を友人に伝えたのは大正三（一九一四）年の秋、東京帝国大学の二学年の折であった。「彼」における高校生の「僕」（≡芥川）が、未だ全編読破はしていなかった「ジャン・クリストフ」の第一巻のみを友人に貸したということも理論上は有りうるが、現実的には蓋然性が低い想定だろう。芥川は晩年の創作において、「僕」と同作との出会いを自身の体験より少なくとも二年半は早く設定し、しかも実時間における出会いの時よりも前に、その書の一部を焼いてしまふ展開を作っていることになる。「彼」の中では、友人の遺骸と共にその蔵書が焼き捨てられ、「それ等の本の中にはいつか僕が彼に貸したジャン・クリストフの第一巻もまじつてゐるのに違ひなかつた。この事実は当時の感傷的な僕には妙に象徴らしい気のするものだつた。」と本文にあるが、芥川における「ジャン・クリストフ」への最後の言及がそれが喪われるものであるという点に、同作との静かなる訣別という正に「象徴」を読む欲望に論者としては駆られる。

「ジャン・クリストフ」からの影響が考えられる芥川創作作品

まとめを前にもう一節を追加し、ここでは「ジャン・クリストフ」からの影響が想定される芥川作品＝小説を改めてリスト化しておきたい。

まず作中にその名が見られるものとしては、ここままで確認してきたところから以下の通りである。

- ・「創作」 大正五（一九一六）年九月 『新思潮』
- （・「あの頃の自分の事」 大正八（一九一九）年一月 『中央公論』 ※論者はこれを創作要素の強いものと見ている。前稿参照）
- ・「或る恋愛小説―或は「恋愛は至上なり」―」 大正十三（一九二四）年五月 『婦人グラフ』
- ・「彼」 昭和二（一九二七）年一月 『女性』

次いで、作品自体にその名はないが、これまでに「ジャン・クリストフ」からの影響が指摘されてきた芥川作品を、それに対する考察と共に紹介する。

「羅生門」―大正四（一九一五年）十月 『帝國文学』

首藤基澄は「芥川龍之介「羅生門」の構造――「ジャン・クリストフ」と「こゝろ」の受容――」（『キリスト教文学』一九九八年五月）で「羅生門」に「ジャン・クリストフ」の影響が見られると主張しているが、同論はその前提において芥川の吉田弥生への失恋事件を非常に重く見、その前後の時期に出された芥川書翰中の表現から極度に象徴的な意味を蒸溜している上、そのような操作を経て論者の中に造り上げられた（出発期の芥川）像と作品「羅生門」を無媒介・直接的に結び付けて論の核心とする一方、実際の表現＝本文レヴェルで「ジャン・クリストフ」と「羅生門」を重ねる根拠として挙げられるのは両作品においてそれぞれ点景として登場する「蟋蟀（せりぎりす）」の一点、だけであり、説としては採ることができない。

即ち、「羅生門」冒頭に登場する「蟋蟀」（首藤は海老井英次の論を援用して、これを古語「せりぎりす」）今の「こおろぎ」を指すものではなく、あくまで現「せりぎりす」であるとする）は原拠『今昔物語集』卷二十九「羅城門登上層見死人盗人語第十八」になく、芥川がこれを「ジャン・クリストフ」から取ったとす

るのだが、同論にて根拠として挙げられているのは長大な「ジャン・クリストフ」の物語の中から僅かに二箇所の背景的自然描写部分、しかも大地や空・川の様、あるいは蛙の声などに交じって出てくるキリギリスという一語のみである。その場面を含む前後で叙される伯父・ゴットフリートの物語あるいはキヤラクターに芥川が興味を惹かれ——印象に残ったという指摘はその通りだと思う（前稿、大正六（一九一七）年十月脱稿の「春情句集」の序）の項を参照）が、そこから特にキリギリスだけを抜き出して光を当てるのは字義通り牽強附会であると言わざるを得ない⁷。

① 「きりしとほろ上人伝」 大正八（一九一九）年三月五日『新小説』

本作は十三世紀に成立した *Jacobus de Voragine* の *Legenda Aurea*（ヤロフス・デ・ウオラギネ編『黄金伝説』）所収 *'Sancti Christophorus'* 「聖クリストフォロス」の伝承に基づき、芥川はそれを旧蔵書中に見える *'The Golden Legend; Lives of the Saints'* (W.Caxton 訳, Cambridge Univ. 1914) によって読んだことが風知られている。彼はその伝説に「多少の潤色を加へ」

（小序）て小説として再編、終節では「きりしとほろ」が異様な重さをもつ「白衣のわらんべ」を背負って荒れ狂う大河を辛くも渡り切り、それが実は「えす・きりしと」であったことが判明するという場面を以てクライマックスとしているが、「ジャン・クリストフ」末尾においても、臨終のクリストフが異様な重さを持った小児を背負って渡河し、最後にその児の口から自らが「是れから生れる時代」である⁸と告げられる場面（実景というより幻想風景）で幕が閉じられている。それらの点を以て宮坂覚は「きりしとほろ上人伝」に「ジャン・クリストフ」が「何らかの形で影響を与えたと考えられる」とやや控えめに述べているが、前者において後者が意識されていることはまず確実と視てよいかと思う。

② 「素盞鳴尊」 大正九（一九二〇）年三月三十日（六月六日『大阪毎日新聞』、同（六月七日『東京日日新聞』（共に休載日あり）

※ 神代小説の着想あるいは漠然とした執筆意図は可也早くからあったと見え、大正七（一九一八）年四月二十四日及び七月三十一日附の薄田泣菫宛書翰

に言及がある。但し実際の執筆は連載日程ぎりぎりです。『書き出す時からやつつけ仕事だった』（同九二〇）年四月二十八日附 恒藤恭苑）上、開始後も執筆に難渋した模様が書翰からは窺える。

清水康次は、「素盞鳴尊」の第三十一回、大気都姫を刺殺してその洞を飛び出した素盞鳴が無我夢中で大自然の中に飛び込み、「今まで忘れてゐた自然の言葉」に圧倒される場面と、「ジャン・クリストフ」第九卷「燃ゆる荊」の終わり近く、またまた問題を起こし蟄居・沈滞していたクリストフの「復活」——創造力（の源）が彼に戻ってくるシーンを比較し、「自然の中に「雷のやうに」溢れている力が主人公の中に急激に流れ込み、主人公の覚醒を促している点では、二つの文章は共通している。」「素盞鳴尊」において、素盞鳴の覚醒を描くとき、芥川の頭の中には、『ジャン・クリストフ』の文章と、芥川自身の過去の体験とが浮かんでいたのではないだろうか。」と述べる¹⁰が、首肯できる見解である。因みに、ここに言う芥川の過去の体験とは、大正三（一九一四）年十一月十四日附原善一郎宛書翰（全集〈書簡番号〉164）、同八（一九一九）

年七月三十一日附佐々木茂索宛書翰（同620）などで語られていた、力に満ち溢れた芸術を憧憬し只管その極北に信賴することができた時期の経験を指している。前稿の内容と一部重複するが、書翰620から抄出しておく。

僕一時（二十三才前後）精神的に革命を受け 始めてゲエテの如きトルストイの如き巨匠を正眼に見得たりと信ぜし時あり 僕をしてその境地に置きしもの 種々複雑なる事情あれどジャン・クリストフの影響大なりしは今に到つて忘るゝ能はず 今にして思へば当時の僕は始めて天日を仰ぎしもの如く唯天日あるを知つて諸他の星辰あるを知らざりしが如し

既に見た通り、芥川における「ジャン・クリストフ」初読直後の感動は非常に大きかったものの、それを直接的に彼の作家的出発（意気込みという面では多少は影響を認めてもよいかもしれない）あるいはその前夜の作品——例えば「羅生門」など——に結びつけるには留保が必要であると思われる。初読の印象が直

接に語られているのは現存書翰に見られるところでは極僅かな友人に対して、それも各一回のみであり、その後は——やはり感想から認められるところでは——「ジャン・クリストフ」のみに留まらない、例えばトルストイに代表されるような「偉大な芸術」家（前稿、書翰190参照）たちの巨大な「力」の称賛へと対象・方向性が拡大されているのである。

加えて、執筆／発表の時間・モチーフ的にも「羅生門」との連続性が認められる「鼻」が掲載された『新思潮』創刊号（大正五（一九一六）年二月十五日）の後記「編輯後に」では「これからも今月と同じやうな材料を使つて創作するつもりである」と述べている。この時期の芥川において、作品造形において最も意識されたのは、やはり『今昔物語集』など説話を中心に日本古典の世界・モチーフを作品にとりこみつつ「単なる歴史小説（同前）以上のものを産み出す点にあつたと考えるのが自然である。

「ジャン・クリストフ」そのものが作品形象化のレヴェルでの影響を示すまでには、芥川の中でいまま少しの時間＝自らの内部にその印象・記憶を沈殿・発酵させるだけの過程を要したのではないだろうか。そして

改めてそれが浮上してくる時期が大正五（一九一六）年後半から翌年にかけて、仲間たちと第四次『新思潮』を続ける中で作家職業化への意識が醸成されていった時期においてであると考ええる。自身の「文壇に出るまで」の回想にて同作への言及が重ねられるのもそのためであると同時に、そこでは実際の読書から一旦間をおいたことで、同作の中でも自らにとって特に印象深い部分が——あるいは加工された記憶として残り、それより以後の作品造形にも活かされているのだと思われる。

【まとめ】

芥川と「ジャン・クリストフ」の関わりについては、これまで大正三（一九一四）年十一月十四日附原善一郎宛書翰（164）に見える「此頃はロマン・オランのジャン・クリストフと云ふ本を愛読してゐます」という言を起点、そして大正九（一九二〇）年八月『文章倶楽部』掲載の「愛読書の印象」で語られる「一年前から」の心境変化および「此間「ジャンクリストフ」を出して読んで見たが、昔ほど感興が乗らなかつ

た」という発話を終点として語られてきた。私自身、本稿において芥川自身による言及を確認する中で、特に(一)ではそのような論調で整理をしてきたし、あるいは終点に閱してはもう少し早く「芥川のジャン・クリストフ熱は大学を卒業してのち、作家として活動を始めるに及んで徐々に鎮静し」(剣持武彦¹¹)ていたとする纏めなどもあるが、作家による発話を一種のテクストとして捉え、改めて「ジャン・クリストフ」から創作への流入や影響を考えるとした場合には、もう少し深い状況背景が想起できそうである。

ここまで見てきたところから明らかな如く、芥川が「ジャン・クリストフ」に触れた時期というのは、彼の先輩筋や(後の)第四次『新思潮』の仲間、即ち同時代青年たちを中心として醸された(ロラン熱¹²)が大いに盛り上がっていた時期である。その時点での若さに加え、思潮的流行には特に敏感な芥川のこと、そうした素材や雰囲気感化を受けなかったとは考え難い。大正三(一九一四)年から翌年にかけての書翰での言及は、そんな芥川の熱意を証するものとしてある。更にその翌年に発刊された第四次『新思潮』の誌面、特に同人らの声がより直接的に響く後記では、創刊号

から「吾々青年」のロランに対する熱意と傾倒ぶりが見られる。尤も、そのような盛り上がりは成瀬正一訳「ロオラン氏の手紙」を巻頭に置いた第四号を最後の絶頂として、以降は退潮もしくは沈静化の態を呈する。同号における成瀬の熱心な言及を先に引いたが、翌第五号「校正の後に」の約三分の二を占めて語られるのは久米による自作弁護と自身の将来即ち「僕の戯曲家としての生命」を期すという表明であり(彼はこの前後の号でも同様の言及をくどく行っている)、恐らくこの号編輯担当であった松岡による残りの部分を埋める文章の中にもロマン・ロランの名は一切出てこない。その部分(後記全体)の最後一行に「成瀬はこの八月初旬に欧米留学の途に上る(松岡)」¹²とあるのも――後代の眼に結果的にそう映るのかもしれないが、非常に示唆的である。それは創作に対する向き合い方あるいはその捉え方の違いでもある。日本から離れたこともあり、成瀬がそれを青年的熱意とも連動するような純粹性において捉えようとした(『新思潮』第四号において、ロランを語る成瀬の言葉の端々にそれが強く表れている)のに比して、他の同人らは同時代・現実の文壇実態観察を通じて、聴てはそこに入って自ら

の地歩を定めることも念頭に、現実的な振る舞い方・手法としての「創作」との向き合い方と、その先に自身の将来を摸索していたと考えられる。芥川の場合、正にその表れが小品「創作」であつたということである。

成瀬を参照軸とすることで、芥川の「ジャン・クリストフ」及びロランへの接近と離脱はより見易くなる。即ち大正三（一九一四）年から翌年にかけて、「あの頃の自分の事」で言う処に従うなら成瀬とは「二人とも、偶然同時にジャン、クリストフを読み出して、同時にそれに感服」¹³するという体験を共有しながら、成瀬に代表される（文芸的）同世代や豊島与志雄ら少し上の先輩らがその後も引き続き熱烈にそれに対する〈愛〉を語り、紹介・翻訳などでそれを表明し続ける——中でも成瀬においてはロランに対する青年的熱意がその後も永く持続し、かつそんな姿を友人として見続けていた状況において、芥川の方はそうした「ジャン・クリストフ」≡「ロラン熱」の圏内から早期に離脱した、あるいは殊更にそこから距離を取るような態度を見せたのではないか。そのことは例えば既に触れたように「創作」の内容にも現れていると思われる。尤

も、同作、特に末尾部分の叙述から見て取れるのは、「創作」≡作品形象化における対象把握の仕方という、作家的出発期の芥川を貫く重要テーマでもあると考えられ、それについては更に稿を改めて論じることとしたい。

しかし、芥川の中で「ジャン・クリストフ」に対する興味・指向性がそこで全く消滅・沈静化したわけではなかった。自身の作品への、あるいは援用という形での本格的な受容は、寧ろその後から始まるのではないか。それは「ジャン・クリストフ」という作品名や作者ロランの名を明示しない形で、具体的には「きりしとほろ上人伝」や「素盞鳴命」の一部として結実していった¹⁴のであり、私はそのより早い現れとして「戯作三昧」（大正六（一九一七）年十月二十日）十一月四日『大阪毎日新聞』夕刊）をこの系譜に追加したいと考えているが、これに関してもその作全体の意味づけを図る中で芥川が「ジャン・クリストフ」から受容したものの表れ方を述べる必要から、新たな稿が立てられねばならない。

多くの問題を積み残す結果になってしまったが、ここまでの稿はそれらの論に対する謂わば足場作りとし

ての整理であったと見ていただければ幸いである。

※ 芥川作品・文章や発話からの引用は『芥川龍之介全集』(岩波書店 一九九五―一九九八)に拠った。引用文全体に関して、振り仮名は適宜省略、字体は通行のものに改めた。

【附記】本稿は国際芥川龍之介学会 (I S A S) 第十五回大会 (二〇二〇年十二月十九・二十日 オンライイン) 及び、熊本芥川研究会例会での発表内容の一部について再編・再考したものである。両会に於いてご意見・ご指摘いただいた方々に厚く御礼申し上げます。また、熊本県立大学図書館にて相互利用サービスに対応してくださった職員の方と資料の提供に協力して下さった他館・担当者の方々にも同じく謝意を表したい。所謂コロナ禍で、(特に地方から)域外への調査旅行が、あるいは感染拡大地域での施設利用が叶わず、文献資料へのアクセスにおいて大変支障を来していることは、自身の体験に加えて他の研究者からも聞くことが多い。本稿に向けての作業は全集を元に行う部分が多かったものの、細部に関してはそれら取り寄せた資

料がなければ仕上げる事が出来なかった。厚く御礼申し上げると共に、一刻も早く煩わしい条件抜きでの移動の自由が戻ってくることを願っている。

注

1 前掲『芥川龍之介全集』第二十二巻附録『月報』二十一(一九九七・十)に転載されたものを参照した。現在、『浅草文庫』当該号を所蔵しているのは日本近代文学館のみと見られ、今回参観は叶わなかった。

2 ステファン・ツワイグ著・服部龍太郎訳『ロマン・ローラン』がアルスから一九二六年に刊行されている。

3 当時第一高等学校の寄宿舎は本郷区向ヶ丘弥生町(現、文京区弥生一丁目)にあり、芥川は二年生になった明治四十三(一九一〇)年九月から翌年六月まで入寮していた。『芥川龍之介全集』第十四巻『岩波書店 一九九六・十二』「注解」〔三嶋護〕を参照)

4 海老井英次「『羅生門』の(蟋蟀)はキリギリスか コオロギか」『毎日新聞』一九八〇年十二月四日) ↓ 『芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―』(桜楓社 一九八八・二)収録。

5 因みに芥川が読んだカナン (Gilbert Cannan) 訳 "John Christopher I : dawn and morning" (London, William Heinemann 1913) では、当該語は "grasshopper" である。

6 首藤論では引用した小島政二郎『眼中の人』(三田文学

- 出版部 一九四二・十二）に引きずられてか「叔父」と表記するが、ゴットフリートはクリストフから見て母の兄ゆえ、正確には「伯父」である。
- 7 加えて言うなら、「羅生門」における「蟋蟀（きりぎりす）」の重要性は同じく認めるものの、それは冒頭場面の構成素としてのそれであって、小説の全体主題の中心に位置するという見方を稿者は採らない。
- 8 国民文庫刊行会版・後藤末雄訳（大正七（一九一八）年三月刊）に拠るが、訳としてはやや不自然か。芥川が読んだカナン（Gilbert Cannan）訳“John Christopher IV: Journey's end”（London, William Heinemann 1913）ではそれは“the day soon to be born”、現行の岩波文庫版（豊島与志雄改訳「ジャン・クリストフ」第四巻 一九八六・九改版）では「生まれかかってる一日」となっている。
- 9 「芥川龍之介『さりしとほろ上人伝』論——「奉教人の死」、そして『黄金伝説』との関わりを中心に——」笹淵友一編『物語と小説—平安朝から近代まで—』（明治書院 一九八四・四）。
- 10 清水康次「『野生』の系譜—芥川龍之介一面—」（『国語国文』一九八九年二月）→『芥川文学の方法と世界』（和泉書院 一九九四・四）第十一章、ここでは後者を参照。
- 11 菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』（明治書院 一九八五・十二）の「ジャン・クリストフ」の項より。
- 12 『新思潮』第六（八月）号後記に松岡による記述で「成瀬は愈々本月三日横浜解纜の静岡丸で、先づ米国へ向つて出発することに決まつた。」とあり、これは事実合致する。
- 13 但しこの言、手放して前提化し得ないことは前編（二）の注4を参照のこと。
- 14 「愛読書の印象」（大正九（一九二〇）年八月『文章倶楽部』、前稿参照）に語られる、芥川の中での「燃えるやうな力の崇拜」退潮の反映を「素盞鳴尊」の〈改作〉に見るといふ、注10・清水康次前掲論の見解は方向性において首肯できる。ただ、清水はそれを「愛読書の印象」で語られる芥川の心境（なるもの）に時期的にも重ねようと「一年前から」という記述がどれほど正確なものかは明らかではない」とか「素盞鳴尊」の構想を暖めている間に、芥川自身の気持ちが大きく変化していたのかも知れない」などとやや苦しい論述を行っているが、私は「ジャン・クリストフ」を受容して「素盞鳴」における「自然の言葉」≡野生の呼び声を執筆していた時点の芥川と、新聞紙上でひとまずの完結を見たのち、当該部分も含め全体の前から四分の三ほどを切り落とし、残りのみを独立作「老いたる素盞鳴尊」として単行本『春服』（春陽堂 一九三三・五）に収録する判断を下した時の芥川の間には、幾許かの時間、あるいは批評的自己言及と創作行為との間のレヴェルの違いを認めてもよいのではないかと考えている。即ち、「愛読書の印象」の言はそれとして、しかし「素盞鳴尊」で彼の覚醒を描いた時の芥川の中には「ジャン・クリストフ」の声が響いていたと思うのである。